

科学・技術ソサエティからの発信ー学協会連絡会シンポジウムに参加してー

Message from the Society of Science and Engineering: Report on the 8th EPMEWSE Symposium

松尾由賀利 Yukari MATSUO

男女共同参画学協会連絡会の設立から今年で8年になります。この連絡会には正式加盟とオブザーバー加盟合わせて現在67学協会が加盟しており、総会員数は41万人にのぼるとのことです。日本全体でもこれほど大規模な学術団体ネットワークはそう見当たらないのではないかと思います。これだけの会員数をもつ学協会が男女共同参画をキーワードとしてさまざまな活動を行っています。設立記念日である10月7日に毎年シンポジウムが行われており、今年は「男女共同参画と社会」をテーマとする第8回シンポジウムが160余名の参加者を得て理化学研究所で開催されました。

本シンポジウムの詳しい内容は後日学協会連絡会ウェブサイト上で報告されますので、ここでは参加者としての感想を中心に述べることにします。今後ますます重要になる科学・技術と社会とのかかわりにおける、男女共同参画が担う役割を考えたいと思います。

午前中は三つの分科会（A：学会を含むリーダーシップ活動の機会均等、B：女性リーダー育成・若手育成、C：自分自身のシステムを知るー科学が動かす男女共同参画社会を探すー）に分かれ活発な議論が行われました。筆者自身は、分科会Bに話題提供者の一人として参加しました。リーダーに求められる覚悟や責任をもつこと、そのために必要な資質や訓練には男女に何ら差がないと認識されました。一方、女性のほうが幼少期より責任ある立場に立つ訓練を受ける機会が少ないという問題、人事権や予算権をもつ女性を増やすことがこれからの課題であること等が議論されました。

午後からの全体会議では主催者、来賓挨拶の後、理研・茅幸二氏による次世代スーパーコンピューター、総合科学技術会議議員・相澤益男氏による科学・技術と男女共同参画についての特別講演がありました。国民の科学・技術に対する期待は大きいこと、第4期科学技術基本計画では課題解決に向かうシステム構築の中に基礎研究も位置づけられていること、そこに人材の問題、女性研究者活躍促進が組み込まれていくとの認識が示されました。

加盟学協会および女性研究者支援事業採択機関によるポスターセッションを挟んで、分科会と連絡会WG（研究者のワークライフバランス、大規模アンケートのフォローアップ、他国の政策と効果の調査）の代表者による

報告と討論が行われました。男女ともに研究者の仕事に費やす時間の長さは衝撃的です。有効な方策はすぐには見つかりませんが、女性研究者支援策が相対的に可処分時間の少ない女性を男性並みの長時間労働に駆り立てるのでは本末転倒であろう、との心配は多くの参加者が感じたのではないのでしょうか。

男女共同参画基本法制定から10年が過ぎました。この10年を思い起こせば、科学・技術のソサエティでも環境整備における進展は非常に大きかったと思います。今後は、女性研究者のリーダー育成や、男女を問わずワークライフバランスをどう取るのかなどの質的展開がより重要になるであろうことを、シンポジウムを通して考えさせられました。このための具体的な提案が求められることも指摘されています。

最後に連絡会活動報告はじめ各種報告が行われ、今回のシンポジウムは盛況のうちに終了しました。会場を見渡すと参加者の約8割が女性であるように見受けられました。通常の科学技術系の学会やシンポジウムとちょうど逆転しています。しかし、男女共同参画は女性のためだけのものではありません。男女共同参画の視点から社会を見つめなおすことで、男女を問わず仕事と私事が充実した人生を実現できるものとするのが目指すところではないのでしょうか。科学・技術のソサエティのあり方を変えることで、科学・技術分野から社会を変える力にしたいものです。そのためには科学・技術にかかわるすべての人々の力が必要です。来年のシンポジウムは参加者が男女同数となり、さらに活発な議論が行われることを祈念してこの報告を締めくくりたいと思います。最後になりましたが、第8期幹事学会である高分子学会の栗原和枝委員長をはじめ、企画運営に携わったすべての方々に心より感謝いたします。



松尾由賀利 Yukari MATSUO

(独)理化学研究所 仁科加速器研究センター
 前任研究員
 理学博士

2001年4月～2003年3月応用物理学会男女共同参画委員
 2008年9月～2010年8月日本物理学会男女共同参画推進
 委員長
 専門はレーザー分光、レーザーアブレーション。
 E-mail: ymatsuo@riken.jp